九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

エミリ・ディキンスン詩抄訳(2)：1861年の詩より

原口，遼

https://doi.org/10.15017/2344409

出版情報：文學研究. 90, pp.1-70, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

エミリ・ディキンスン詩抄訳 (2)

——1861年の詩より——

ここにはエミリ・ディキンスンの1861年の作と見なされている詩から翻訳した。ディキンスンは1830年の12月10日生れだから、1861年は丁度30歳に当る。彼女の詩人としての生涯の中で、翌1862年は「驚異の年」(“annus mirabilis”)と呼ばれて最も豊穣な年であり、その年には全部で366 編の詩を書き残している。しかし今回は紙幅の制限によって、その前年の1861年の詩群から翻訳しておくのである。これは前号(『文学研究』第89揖)からの続きであるので、翻訳の際の底本、基準等については前号を参照されよ。

なお今回は、前号の参考書誌にも記した谷岡清男訳『愛と孤独と:エミリ・ディキンソン詩集』Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ(ニュー・カレントインターナショナル)を参照させて頂く機会が多かったので、特に謝意を表しておきたい。ただ若干の詩等(例えば131, 227, 243, 269番等の詩等)ではそれらの受け取り方、解釈の仕方が谷岡訳と大幅に違って来たが、そのことによって私の氏への敬意は減じない。むしろ難解をもって聞こえるディキンスン詩の本邦初訳という未開拓の領域にチャレンジされた、氏の「フロンティア・スピリッツ」に称賛の言葉を惜しまぬものである。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

[217] 主よ、私は他に話す人を持っておりません。
　　それであなたにご迷惑をおかけするのです。
　　私はあなたを久しく忘れておりました者です。
　　私のことを憶えていて下さいましたか。
　　私もこんなにも遠くまで来たことはありません。

でもそのことぐらい何の苦でもありません。
私はあなたに自分でも支え切れぬほどの
健気な心を持ってまいりました、
私自身の心の中に包んで。
そのうち私自身の心が余りに重くなりました。
でも奇妙なことに、その健気な心が去ってより、
　私の心はさらに重たくなってしまったのです。
それはあなたにとってあまりに大きいですか。

[218] スー姉さん、本当？
身二つになったって？
あたし行きたくないわ、
だってあやすのが何だか気味悪いんだから。
あたしがそっちに着くまで
ちっちゃな赤ちゃんを
コーヒーカップにとじ込めておくか、
ピンに紐ででも結びつけておけたらいいのに。
でなかったら猫の「トービィ」のこぶしででも、
しっかりと押さえておいてほしいわ。
しーっ、静かに！　今、参りますからね！

[220] 私の請い願う顔がついに、
彼女から拒否されないように、
むしろ私の方からドアを閉じてもよろしいでしょうか。

[221] 「夏」ではありえない！
それは通り過ぎたのだから！
「春」にはまだ早い！
黒鳥たちが歌うときまでに、
あの長い白い町を横切らなければならないから。

「死」でもありえない。
それには赤すぎる。
死者は白衣で出かけるのだから。
かくて日の入りが私の質問をおしまいにした、
クリソライトのカフスでもって。

[222] ケイティが歩くとこの素朴なペアはその脇につき従う。
ケイティが倦まず弛まず走ればペアは道をついて行く。
ケイティが膝まづいても、愛する両手は敬虔な膝を摑み続ける。
ああ！ケイティ！　自分の幸運に微笑むのよ、そのペアがあなたにしっかりと
　　編み込まれている以上。

[223] 今日は微笑を買いたくてやって参りました。
たった一つの微笑でよろしいのです。
あなたのお顔の一番かすかな微笑でも
私には十分間に合うのです。
ほんのかすかに輝くばかりで、
他の人たちなら気づきもしない微笑みのかけらででも。
私は店先までやって来て、たってのお願いをしているのです。
譲っては下さいませんか。

私は指にはダイヤをはめております。
ダイヤの値打ちをご存じですね。
私は真赤な夕焼け色のルビーも持っています。
星のようなトパーズですら！
ユダヤ人ならさぞかし「掘出物」と思うでしょうに。
ねえ、微笑を頂けませんでしょうか？

[225] キリストよ！　あなたの磔が
あなたにヨリ小さな者たちを

想像することを可能にしますように。

キリストよ！　あなたの復活されたお顔が、
あなたに天国において
私達の顔を忘れさせませんように。

[226] もしあなたが私の姿を眼にしながら
海で遭難したのなら、
明日は死ぬ運命で
横たわっているのなら、
天国の戸を叩きながらも、聞いてもらえないのなら、
それなら神様があなたを中に入れて下さるまで、
私は神様にうるさく纏いつくことでしょう。

[227] あの赤ちゃんに教えてやって、その子が名前をしゃべり出すときには、
ぶつぶつ言う苺色の唇で
こんな名前も言ってくれるようにと。
私の耳朶(じだ)が今日の私の思いのように、
その子の寝所(ねぐら)に近づいたなら、
――神よどうぞ禁じないでください――
何だか「エミリィ…」みたいに聞こえる
そんな名前も。

[228] 金色に燃え上がり、そして紫色に冷めて行き、
豹のように空に跳びはね、
そして懐かしの地平線の足元に、
斑の顔を伏せて死ぬ。
川巓(かわうそ)の窓辺より低くに身を屈(こご)め、
屋根に触れ納屋を染め、
牧場に向かって帽子にキスをしてみせ、

かくして昼の魔術師は消え去った。

[229] 牛蒡(ごぼう)のいがが私のガウンに爪をかけた。
悪いのは牛蒡の方ではない。
私のガウンが悪いので、
私があまりにも牛蒡の住処(すみか)に
近寄り過ぎたのだから。

沼地が私の靴を侮辱する。
沼地には他にどうしようもない。
沼地の知っているただ一つの仕事は、
人に水をはねかけることだけなのだから。
ああ、だからむしろ憐れんでやるべきなのだ！

小魚たちには軽蔑させるさ。
象の、静かなる眼は
さらに遠方を見ているのだから。

[231] 神は勤勉な天使たちに、
午後は遊ぶことを許される。
私は一人の天使に会い、
たちまち私の学校友達のことを忘れた。
日が落ちると、
神は天使達にさっさと家に帰るようにと呼ぶ。
私は私の天使を失ったが、王冠遊びをした後とて、
おはじき遊びの何とつまらないことか。

[232] 太陽がちょっと朝に触れた。
朝はもう幸せ一杯。
太陽が住みついてくれるとばかり思ったのだ。

そうなると一生はすべて春だと思って。

朝は自分のことを果報者と感じた。
すっかり舞い上がって天女のよう！
これからは何というお祭りの毎日か。
一方、王様はするすると、
悠揚せまらず果樹園を巡った。
王様の誇り高く縞模様の裾は、
新たな必然性を後に残した。
王冠がないという必然性を。

朝はうろたえよろめいた。
自分の王冠を求めて弱々しく手探りした。
それからは香油も塗ってない額が、
彼女の唯一の冠。

[233] ランプは内側でしっかりと燃え続ける。
奴隷が油を注いでも、
繁忙な灯心にはどうでもよいこと。
己れの燐(りん)の仕事に勤しんでいるので。

奴隷は油を注ぐのを忘れる。
ランプは、奴隷がいなくなって、
油が切れたことにも気づかずに、
金色に燃え続ける。

[234] おっしゃる通りです。「道は本当に狭いです」
それに「門を通るのは難しいです」
それに「そこからはいる者が少ない」というのも
おっしゃる通りです。

そのことは高価です。「紫色」もまた高価！
それは文字どおり呼吸の値段です。
それは取引き筋で「死」と呼ばれる
「墓によるディスカウント」だけができるのですから。

そして、その後には天国が待っています。
善男には「配当」が、
悪人には「牢獄行き」が待っています、
きっとそうでしょう。

[235] 法廷は遠くにあって、
私は誰も裁判官を持っていない。
私の主権は傷つけられた。
神の恩寵を得るためなら、死にもしましょう。

私は王の御足を求める。
私は言う、王よ憶えていて下さい、
あなた自身、ある日、子供になると、
もっと大きなものを求めるだろう、と。

その帝国は、皇帝のもの。
私と同じ位、小さいと聞きます。
その日には、あなたの事に、
立ち入れるように、王権を下さい。

[239] 「天国」とは私の手が届かないもの！
木の上の林檎。
もしそれが絶望的な高みに吊りさがっているとすると、
それが、私にとっての「天国」！

空行く雲の色、
丘の向こうの、家の裏手の、
あの禁じられた場所。
そういう所に楽園は見つかる！

天国の悩ましい紫色、午後、
心を欺く囮(おとり)。
ほんの昨日、私達を鼻であしらった、
あの魔術師にまたもや魅せられているのだ。

[240] ああ月よ、星よ！
お前達はとても遠い。
でもお前達より遠いお方が
もしもおられないとしたら、
それが天空ほど遠くても、
腕尺の一、二尺ほどの近さにしても、
私が仕事を止め出掛けると思うか。

私は雲雀から
帽子を借りられる。
それにシャモアの銀のブーツと、
大トナカイの鐙(あぶみ)を借りて、
今夜、お前達とは一緒になれることだろう。

しかし月よ、星よ、
お前達はとても遠いけれど、
お前達より遠くにおられる方がある。
その方は天空より遠くにおられる。
それで私は決してそこへ行くことができないのだ！

[241] 私は苦悩の表情が好き。
なぜならそれが真実だと知っているから。
人は嘘いつわりから痙攣しない。
真似事で苦悶しない。
眼が一度曇るともうそれは死。
たとい人並みの苦悩であっても
額に汗の数珠玉を通すことは
真似事なぞではできはしない。

[242] 物事の頂上に立って、
樹のように眼下を見下ろすと、
煙がそこから払われて、
その場所に鏡が光を置いても

魂一つまばたかない、
魂に傷があれば別だが。
健全な魂は丘のようにして立つもの。
稲光も脅かすことはない。

完全な魂はどこにいても恐がらない。
自らの行為によって守られているので、
他の人なら真昼にすら行かない所でも、
それらはびくともせぬ頭(ず)を持する。

星々は汚れた世界の上に
あえて時々光る。
そして太陽は星々に証明をしようとして、
あたかも心棒に支えられているかのようにしっかりと運航している。

[243] 私は天がテントのように、

光るカンバスをたたみ、
支柱を引っこ抜き消えたのを知っている。
板材の音もさせず、
釘を引っこ抜く音もさせず大工も用いずに。
ただそこにはサーカスの見せ物が、
北アメリカの他の地へと移動して行ったことを示す、
何マイルもの道々の驚嘆の凝視があるのみ。

跡形もない。ほんの昨日、
目を奪わさせた虚構の物の跡形すらない。
演技場も賛嘆も、
演技者も軽業も、
すべて消え果ててしまった。
それは鳥の遥かなる飛行が、
ただ淡い色彩と、
オールの水飛沫(しぶき)と一しきりのはしゃぎを見せ、
あっと言う間に呑み込まれて視界から消えたのと同じ。

[244] 魂が遊んでいるとき仕事するのは易しい。
しかし魂が苦しんでいるとき、
魂が玩具を片付けているのを聞くときは、
そのときは仕事をするのは困難。

骨や皮が痛いのは、単純。
しかし神経に刺さる錐(きり)は、
鋭く恐ろしく苛(さいな)む、
ちょうど手袋の中の豹のように。

[245] 私は宝石を指に握り、
そして寝入った。

日は暖かく、風も眠たげだった。
私はつぶやいた「宝石は大丈夫」と。

私は眼を醒ますと馬鹿正直な指のことを叱った。
宝石が消えてしまっていたのだから。
そして今では紫水晶の想い出だけが
私が持っているすべて。

[248] なぜ私は天国から閉め出されたのかしら。
私が大声で歌いすぎたというのかしら。
でも私は小鳥の様に恐る恐る、
「短調」の小っちゃな歌が歌えるだけ。

もう一度だけ天使たちには
私のことを調べ直してもらいたい、
私が本当に迷惑をかけたのかどうか、見なおしてほしい。
でも閉め出さないで！

ああ、もし私が「白い衣」を着た
あのお方で、
扉を叩いたのが小さな手だったなら、
私なら拒否することなどできないでしょう。

[249] 荒れ狂う夜よ、荒れ狂う夜よ！
あなたと一緒なら
荒れ狂う夜も
むしろ贅沢。

港にはいってしまった心には
大風も無意味。

もはや羅針盤もいらず
海図もいらない。

私はエデンの中を漕いで行く。
ああ、海よ！
今宵こそ、
あなたの中に錨を下ろせたら。

[251] 塀の向こうに、
苺が植わっている。
えいやっとよじ登ったら、
塀なんて乗り越えられるわ。
苺はすごくおいしそう！

でも、もしエプロンを汚してしまったら、
神様がきっと叱られるわ！
ああ、もしも神様が男の子だったら、
やれるとあらば断然乗り越えられることでしょうに。

[252] 私は悲嘆の川を渉ることができる。
どこまでもどこまでも。
私は悲嘆には慣れている。
でも喜びならほんの一押しででも、
私の足は乱れてしまう。
私は酔ってしまって千鳥足。
小石よ、笑わないで。
喜びは私にとって慣れないお酒！
まさにそれだけのこと！
苦痛はむしろ力。
規律によって縒り合わせられ、

重荷がぶら下がっても耐えられます。
巨人に香油を与えてご覧なさい、
そうすれば巨人が萎えてしまうのは人間なみ。
巨人にヒマラヤを与えてご覧なさい、
ヒマラヤなんぞ運び去ってしまうのですから。

[253] ご承知の通り私にはあなたの人生が見えません。
だから推量するしかありません。
教えてください、今日は何度あなたの心は私のために痛みましたか。
何度、この遠い私のために
りりしい眼は潤みましたか。
でも推量すると心が痛んで、
私の眼も随分と潤みます。

私の顔がそんなにもじいっと待ち望んでいる、
あなたのお顔は余りにおぼろで、
私の臆病さが取りすがろうとする、
あなたの力は余りに遠く、
変わりはてた顔のように、
私の心を悩ませています。
それはやっとのことで満たすことができそうな、
心の空虚さをじらすのみ！

[254] 「希望」には羽があって、
魂の中に止まる。
そして歌詞のない歌を歌うが、
決して歌い止めることがない。
それは突風の中でこそこよなく優しい歌に聞こえるが、
そんなにも沢山の人たちの心を温めてくれる、
小鳥の心をどきどきさせるとは、

きっと嵐は虫の居所が悪いに違いない。

私は小鳥の声を最寒冷の地にも聞いたし、
人っ子ひとり訪れることのない海上でも聞いた。
しかしどんな窮境にあっても、
小鳥は私からパン屑一つねだらなかったのだ。

[255] 死ぬにはほんの僅かの時間しかいらない。
苦しみはないと聞く。
少しづつ気が遠くなるだけ、
そしてそれから見えなくなる。

その日には黒いリボン。
帽子にはクレープ。
そしてそれから綺麗な日の光が訪れ、
私達が忘却することを助ける。

あの今は亡き神秘なる人は、
もし私達への愛がなかったならば、
あの最も安らかな眠りに就くときに、
きっと渋ることもなかったでしょうに。

[256] もし今、私が道に迷っていても、
かつて私が見い出されたことがあるということは、
依然として私の歓喜。
かつて、私にあの白い門が
突如として輝やかしく開かれ、

私の戸惑って見つめる顔を、
天使達が私のことを心配しているみたいにして、

柔和そうに覗き込み、
そして羊毛の髪の毛で私に触れたのだった。
ご存じのとおり、私は今追放されている。
ご推察も下さい。
神様の顔があなたからそむけられたとき、
それはなんと淋しいことかを。

[258] 冬の午後、
陽の光が斜めに射すことがある。
それは大聖堂の調べのように
重く胸にのしかかる。

それは私たちにこの世ならぬ痛みを与えるが、
私たちはその傷口を見つけることができず、
ただ意味のこもった
内なる変化を感じ取るだけ。

そのことは誰にも伝えることはできない。
それは封印された絶望。
天から私たちの元へと送られて来た
荘重なる痛み。

その光が射すとき風景は耳を澄まし、
影は息を詰める。
その光が薄れてしまうや、
それは死相のようによそよそしい。

[259] お休みなさい！　蠟燭を消したのは誰？
きっと嫉妬(やきもち)焼きの西風だわね。
ああ、お前はちっとも知らない、

空の灯心を天使達が何と長い間、
苦労して守って来たのかを。
それもお前のお陰で消えてしまった。

あれは灯台の火の光だったのかも知れない。
船乗りが暗闇でオールを必死に漕ぎながら、
見たい見たいと乞い願っていた光だったのかも知れない。
それとも消えかかったランプの光だったのか、
清らかな朝の起床の合図を鳴らそうとしていた
野営地の鼓手を照らしていた光だったのか。

[261] 私のリュートをしまって頂戴。
私の音楽が何の役に立ちましょう。
そもそも私が魅惑したいと思う唯一の耳が、
大理石が音楽を聞くみたいに手応えがないのでは、
きっと讃美歌でも啜り泣きでもどっちでもお似合いなことなのでしょう。

エジプトの砂漠の「メムノン」が、
彼が朝日に降伏したとき、
彼をすっかり打ち負かしたという
あの歌の調べを私に教えてくれたなら、
それなら恐らく彼らを目覚めさせられもしましょうけれど。

[267] 私達が神様に従わなかったことがあるでしょうか。
それはたった一度だけ！
神様は私達に神様のことを忘れるように命じられましたが、
私達は忘れることができなかった。

もし神様がそんなにトンマなら、
私達はどうすればよいのでしょうか。

せいぜいのろまな若者を愛することでしょうか。
ああ神様、そうなさいませんか。

[268] 私に変われですって！　私に改めよですって！
それならそうもして進ぜましょう。
久遠の丘の上にかすかな紫色が萌え出るとき、
日の入る頃、山脈の上に
かすかな光が揺らめくとき、
一日がこよなく素晴らしく閉じるときには。

[269] 困難を取り囲んでしまえば、
人生は耐えられる。
どんな深さで出血するかを限定すれば、
生気に満ちた赤い血の多くの滴りは、
代数学と同様
魂でも取り扱うことができる。

魂に対していつの時代であれ正確な数値で告げてもみよ。
そうすれば魂は満足して痛みに耐え続けられる。
夕日が沈むのを指折り数え上げる職人のように、
痛みを歌ってすませられる。

[278] 焼け付く日に日蔭を作ってくれる友を、
見つけることの方が易しい、
心の凍えたときに、
心の温かい人を捜し当てることよりも。

少し東向きの風見鶏が、
モスリンの心を恐がらせ追い払う。
もし黒羅紗織りの心が、

オーガンディの心より強固だというのなら、

一体誰を責めれば良いのか。織人(おりひと)か。
ああ！　心を乱す織糸よ！
天国の壁掛は、
いともさりげなく織られたというのに。

[279] 主よ、わが人生に紐を掛けて下さい。
そうしたら私の出発の準備は完了。
馬達をちょっと見てみましょう。
速いわ！　これならいい！

私を一番しっかりとした側に乗せて下さい。
私が落っこちることのないように。
なぜなら私達は「最後の審判」へ出掛けなければならないのだから。
しかも道は所々下り坂があるし。

でも私は道がどんなに険しくても気にしない。
海辺も気にしない。
私自身とあなたとで選択した、
永遠の旅にしっかりとすがりつきます。

これまで生きて来たわが生よ、
これまで馴染んで来たわが世界よ、さようなら。
私のために一度だけ丘にキスして頂戴、
そうしたら私の出発の準備は完了。

[288] 私は名無し！　あなたは？
あなたも名無し？
それなら私たちは仲間だわね。

言っては駄目！　皆が宣伝することよ！

有名になるなんてなんて重っ苦しいこと！
蛙のような出たがり屋だわ。
自分の名を六月の日がな一日、
称賛たらたらの沼地に向かって叫ぶなんて！

[293] 私はやっとあの方の名前を聞くことができるようになりました。
ひどい鼓動の高まりもなく、
魂が止まってしまうような感覚も、
部屋の中に雷鳴を聞くような感覚も感じなくて済むようになりました。

私はもう部屋のあの箇所を
突っ切って歩いていけるようになりました。
あそこであの方は身を回し私も回し、
そしてあの時、私たちの腱はすっかり切れてしまったのでしたが。

私はその箱を揺することができるようになりました。
その中であの方の手紙は増えて行き、
私に留金を打ち込むような、
私の息を圧迫するような力もなくなりました。

私はぼんやりと「恩寵」のことを思い出せるようになりました。
皆が「神」と呼んでいるそれを。
形式がうまく行かなくなったとき、
窮境を和らげることで名高いそれを。

そして私の両手を、
祈る形にします。
あの聖職叙任者の述べられる言葉を

ちっとも知らないけれど。

私の仕事は雲にかかわるようなことで、
その背後に何か力なるものがあって、
それが絶望と無縁ならば、
その力はかすかであれ、
みじめさといったそんなに些小なことも
心に留めてくれる。
というのもその力は巨大すぎてもはや
　　関与なぞしないのだから。

[294] 死ぬ運命にある者は、日の出を
ひとしおの喜びで見つめる。
なぜなら次に日の出が一杯に燃え上がるとき、
それを見られるかどうか疑うから。

明日、首を斬られる者は、
牧場の鳥の声に注意を払って聞く。
なぜならその歌声は彼の首を求めて騒ぐ
斧の心を揺すぶるから。

日の出が魅力ある一日を約束している者にとって、
それは嬉しいこと。
牧場の鳥が挽歌でない歌を歌ってくれる者にとって、
それは嬉しいこと。

[297] それは光のようで、
形のない歓喜。
それは蜂のようで、
日付のない旋律。

それは森のようで、
微風のごとく私的で、
言葉もないが、それでいて
最も誇り高い木をも揺する。

それは朝のようで、
それが終えられたときに最良。
そして永遠の時計が、
正午を鳴らす。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

INDEX OF FIRST LINES OF POEMS TRANSLATED

Following the first lines of the poems are the poem numbers in accordance with those of the Johnson edition. No attempt is made to reproduce the exact punctuation or capitalization of the lines as they appear in the Johnson text.

A burdock clawed my gown, 229
A clock stopped, 287
A shady friend for torrid days, 278
A solemn thing it was I said, 271
Ah, Moon and star, 240
Alone, I cannot be, 298
Blazing in gold and quenching in purple, 228
Bound a trouble, 269
Did we disobey him, 267
Good night! Which put the candle out, 259

God permits industrious angels, 231
He put the belt around my life, 273
"Heaven" is what I cannot reach, 239
"Hope" is the thing with feathers, 254
I came to buy a smile today, 223
I can wade grief, 252
I felt a funeral, in my brain, 280
I got so I could take his name, 293
I held a Jewel in my fingers, 245
I know some lonely houses off the road, 289
I like a look of agony, 241
I shall keep singing, 250
If I'm lost now, 256
I'm nobody! Who are you, 288
Is it true, dear Sue, 218
It is easy to work when the soul is at play, 244
It's like the light, 297
I've known a heaven, like a tent, 243
Jesus! thy crucifix, 225
Many a phrase has the English language, 276
Me, change! Me, alter, 268
Of bronze and blaze, 290
Over the fence, 251
Put up my lute, 261
Should you but fail at sea, 226
Teach him, when he makes the names, 227

The court is far away, 235

The doomed regard the sunrise, 294

The drop, that wrestles in the sea, 284

The lamp burns sure within, 233

The only ghost I ever saw, 274

The robin's my criterion for tune, 285

The sun just touched the morning, 232

There's a certain slant of light, 258

This is the land the sunset washes, 266

Tie the string to my life, my Lord, 279

To die takes just a little while, 255

What if I say I shall not wait, 277

When Katie walks, this simple pair accompany her side, 222

When we stand on the tops of things, 242

Why do they shut me out of heaven, 248

Wild nights - wild nights, 249

You see I cannot see - your lifetime, 253

You're right - "the way is narrow," 234